

---

# 雪の館

\$WALLON

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪の館

### 【著者名】

\$WALLON

### 【あらすじ】

兄を探し、迷い入った山の中に出逢った不思議な少女。時を刻まない彼女に恋し、やつて来た別れ。

## プロローグ

「お前は愛してくるから…」  
- - -

「生きて、私の分まで」

僕の田からいぼれたのは、悲しみの涙だった。

## 第1話

「くつそー。何処だよここは…」

裕也は地図を片手に途方に暮れていた。

兄貴が中国山地にいるという情報を得て1ヵ月、全ての用をこの1週間の準備の為に当てて来た。

しかし4日目して脱落しそうだった。

いや、正確には2日目からその兆候は有った。

つまり、山地の中の道に迷ったのだ。

兄貴は、2年ほど前に失踪した。

旅行に行つて来ると言つて出て行つたきり、連絡が途絶えたのだった。

裕也は役に立たぬ地図を投げ捨て、道無き道をすすんだ。

昼でさえ暗くなるほど木が生い茂つたこの辺りの夜はとても不気味だ。

木々のざわめきに氣をおかしくしそうな恐怖を味わいながら、彼は寝られる場所をさがした。

、明るく成れば何とかなるわ、と自分に言い聞かせるよつて呟えながら彼は眠りについた。

綺麗な鳥の声と微かな光に裕也は目を覚ました。“今日は”  
”という思いでしばらく進んではいたが、昨日から何も食べていなかからか空腹が限界に達して倒れてしまった。

そもそも体が強い方では無いのだ。

今まで持つたのが不思議なくらいだ。

そのまま空を見上げてボツとしていると、何処からかイキナリ女の子が現われた。

自分と同じぐらいの年のその子は不思議な雰囲気を持ち、一瞬にして裕也の全ての思考を止めた。

山中には相応な白い着物のようドレスのよつにも見える服を纏つた彼女は、2、3秒裕也を見て、一瞬不気味な笑みを浮かべた。

そして、次の瞬間には元の無表情に戻った。

「一緒に来る？」

裕也は、何故か彼女と一緒に行かなれば成らない気がした。

## 第2話

木々に囲まれて建つその木造の家が見えて来たところで、その少女は3回目になる裕也の

「名前は？」の問いによつやく

「雪音」と小さく答えてくれた。

しかし、その後もまた彼女は黙り続けていた。

少し広めのその家中は、外見よりもずっと豪華だった。

どうやら、雪音はこんな山奥に一人で暮らしているようだった。

2階の小部屋に通された裕也は、旅の疲れからか軟らかいベッドの上で直ぐに眠りについた。

それからしばらく、何事も無く過ごした。

相変わらず雪音とは殆ど会話がなかつたが、問いかけてくれるぐらいはなっていた。

しかし、何故か裕也の作ったご飯は食べてくれなかつた。と言うより、裕也は雪音が物を食べている姿を見たことがなかつた。

そして、暮らしている内に気付いた事がもう一つある。

どうやら彼女は1人暮らしというわけでは無さそうだった。

洗面所には既に一つの歯ブラシが置いてあつたし、自分と雪音の部屋以外にも、人が生活している雰囲気の部屋があつた。

「よく考えたら、僕と同じ年ぐらいの女の子に、こんな山奥で一人暮らしなんてできるわけがない」

そう思い、雪音に家族の事を聞いて見たが答えは返つてこなかつた。そうして裕也がこの家に住み始めて一週間が過ぎた頃、この家に入が入ってきた。

”ただいま”の声と共に入つてきたその活動的で明るいな感じの女性は、裕也を見て一瞬驚いたような顔をしたが、直ぐに笑つて  
「いらっしゃい。あなたもあの娘に助けられたの？」  
と言つた。どうやら彼女も雪音に助けられたらしい。

彼女は茜と言い、裕也より三つ年上の二十さいだそうだ。  
彼女によれば、ここにはあと一人、茜さんの彼氏が住んでいるらしい。

明日にでも帰つて来るだうと云つことだつた。

雪音は茜さんの前でもやはり無口だった。そして裕也がこの家に住み始めて一週間が過ぎた頃、この家に人が入つてきた。

”ただいま”の声と共に入つてきたその活動的で明るいな感じの女性は、裕也を見て一瞬驚いたような顔をしたが、直ぐに笑つて  
「いらっしゃい。あなたもあの娘に助けられたの？」  
と言つた。どうやら彼女も雪音に助けられたらしい。

彼女は茜と言い、裕也より三つ年上の二十才だそうだ。  
彼女によれば、ここにはあと一人、茜さんの彼氏が住んでいるらしい。

明日にでも帰つて来るだうと云つことだつた。

雪音は茜さんの前でもやはり無口だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6830e/>

---

雪の館

2010年12月10日13時25分発行